洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

盛夏随想

京都大学名誉教授
大正六年卒・工博
松田長三郎

長い鬱陶しい梅雨が漸やく終って（七月二十日）、これから愈々本格的な夏になる。私共の青少年時代には、盛夏ともなれば、水を打った庭前に床机を出して、夕食後のひと時を、団扇片手に、家族とともに、夕涼みを楽しんだりもしたものである。今のように、汚されていない澄み切った夜空に、光り輝やく無数の星々や、天の川などを仰ぎ見ては、お星様の数々や、広大無辺の神秘な大宇宙を、あれこれと、ロマンティックに楽しく語り合ったりもした。当時に較べると、科学・技術の驚くべき進歩は、わが太陽系の属する銀河系には、およそ、1000億の太陽があり、そんな銀河系が1000億もあるという、何とも、気の遠くなるような大宇宙が展かれていることが判って来た。

周知のように、わが太陽系は、太陽を中心として、その周囲を規則正しく廻転運行する九つの惑星の外、数十個の衛生、数万個の小惑星、彗星その他の小さい天体からなり立っているし、近来は、数十個の人工衛星が飛んでいる。太陽と最も遠い惑星の冥王星との距離は、光速で約5時間半。わが太陽系の属する銀河系の中心まで約3万光年。（一光年は、秒速30万キロメートルの光が、一年間に通過する距離）この中心の周りを太陽系は廻っている。他の銀河系である、おなじみのアンドロメダ星雲までは、約190万光年、地球上から観測できる宇宙のスケールは約50億光年という。

当今、問題になっている「宇宙開発」の意味する宇宙は、ロケットや人工衛星などの飛翔距離、高々、この太陽系のうちの、月或は地球に近い、言わば手の届くような、ほんの小範囲に過ぎないので、大宇宙に比ぶれば、それこそ、ちりやほこりにも及ばぬものである。しかもこの宇宙は、恐ろしい勢いで膨脹しつつあり、幾多の星が生成し、死滅しつつあると、天文学者や物理学者は教えている。この宇宙に涯があるか無いか。この地球に涯があるか無いかすらが問題になっていたのは、数百年前まであった。それが、こんな途方も無く大きな空間や時間の存在を確認できるようになった人間の英知は感嘆せずにはいられない。しかも尚、一方においては、分子や原子・電子・陽子・素粒子に至る超極微の世界まで、微に入り細に亘って研究が進められ、或は更に（これから先きはSF的仮定であるが）幽子を考えて、心霊界の現象を解き明かそうと努力している電気学者もある位で、人間の想像力、空想力は果てしなく拡がって行くが、これは、やはり科学・技術は勿論、凡ての学問を、向上発展させて行く原動力であると思われる。

昨年秋の石油ショック以来、各国ともエネルギー問題の解決が刻下の急務となって、わが国でも、所謂サンシャイン計画として知られている太陽エネルギー利用を主とした一連の研究計画が、三十年を期して計画せられている。太陽のエネルギーの根源は、中心部で行なわれている熱核反応にある。即ち4つの水素から一個のヘリウムができるが、その質量差が太陽のエネルギーとなって、過去50億年間、輝やき続けて来た。今後およそ100億年の寿命があると考えられている。消耗せられる水素は、毎秒約6億トン、略々同量のヘリウムが作られ同時に上記の莫大なエネルギーを生み出しているのである。こんなことは、私共の学生時代には全然判っていなかって太陽の一見、尽くることなきエネルギーの根源については、名だたる大物理学者からいろいろと意見が出されていた。

これに対し、明快な解答を与えたのはアインシュタインで、（$E=mc^2$）その英知は全く、驚嘆に値いする。

どうして太陽系ができたか。どうして生命が発生したか。前者には大体、定説があるようであるが、後者は依然として謎であるが地球上に、最初の生命が生まれたのは、今から20—40億年前と云う。今、分子生物学・生物物理学などが、新興の科学分野として、急速に脚光を浴びるようになって来ているが、原子物理学のボーアや波動力学のシュレーディンガー（この人には一九三一年頃、お目にかかった）など、夙に物理学者らしく相当突き込んだ推論をしていることは敬服する。今や生物までも人工的に創生できるような段階にまで来ているようだ。これが進めば更に高等な生物まで創作できるときが来るかも知れぬ。こうならば、ものの価値判断もすっかり変って来るだろう。しかも一つの生物、たとえば人間なら人間について、生命の終りにおいて、心のはたらき、精神作用・情操、更には、たましいは、一体どうなるであろうか。物質的な生活機能の停止とともに、消滅するのであろうか。これらの行衛については、今の科学では説明がつかぬ。しかし精神・心霊科学として、方々で根気よく研究が続けられている。近頃は、国の内外ともに、精神的に非常に焦燥・不安、不安定の状態にある。外人で参禅する人も相当にある。こんな時には、いろいろの迷信邪教が、はびこるものである。書店に行けば四次元世界・超能力・超科学・超心理・念力といったような類いの書物が、多数出版されているし、宗教書の氾濫も夥だしい。なかには、一概に迷信として排すべきでないものもあると思う。最近、関英男博士は、流石に電気学者らしく、われわれにもある程度、納得の行くような議論をされていることは傾聴に値いする。学問発達の基礎は、従来の常識を超えあらわる想像力・空

想力を発揮して、新らしい世界を探ることにあると思う。この意味で、私は奔放無礙のある種のSF作家などの思考力には敬服する。

地球上における生命の発現は、適当な素材・環境刺戟があってのことであろう。この宇宙には、地球と同様に、発生、変遷して来た無数の天体があり、同様の状況下におかれたチャンスは、無数にあったであろうと類推することは無理では無かろう。何かのチャンス、はずみで全く別の方向に進むことも考えられるであろう。又何も水や空気に限ったことはない。地球と異った素材・環境・刺戟のもとでは、他の気体や液体の下で、地球の生物とはちがった異種の生物、超高等の生物が、あらわれている可能性や確率もあると考えても良いであろう。

然らば、それ以前、大宇宙創生以前は、どうであったか。こう考えて来ると私共の思考・考察はそれからそれえと果しなく続くが、解決は得られぬ。それにも拘らず、人は考える。これが人間である。夏の夜の星空を眺めながら、飛んだ所に、心の放浪が行ってしまった。筆を世間並みのことに向けよう。

七月十二日（金）洛友会中国支部総会が開かれるについて、鳥養会長に代り小生と、会から山本事務局長、教室から池ノ上教授が列席した（同教授は中国電力で講演された）。同支部は、現在会員教137名で、総会はステーション・ホテルで開催されたが、真田支部長初め役員各位のお骨折りで、30数名の会員が各地から参集せられ、総会も役員改選も滞り無く終了、引き続いて行なわれた懇親会も、和気靄々、しかも、座間をとりもつ美人連中も、サービス満点で誠に和やかな会合であった。総会の詳しいことは幹事さんが記載されることと思われますから省略しますが、原爆を受けた広島の繁盛振りは、目覚ましいものがある。同車した男女6・7人の、スペインから来た外人グループは、この列車で広島に行き、今夕、京都へ引き返すという日帰りの、強行スケジュールであるが、人類史上、最初の原子爆弾の惨害を受けた広島は、外人にとっても大きな関心事である。被爆当初は、70年は草も生えぬ、人も住めぬと宣伝されたその広島が、30年にしてこの繁栄を来したことは、全く驚異である。恐らくこの外人グループも、予期に反するこの素晴しい繁栄に驚くとともに、日本人の旺盛な生活力に、改めて感心して帰国せられたことと思う。

滞在中、真田支部長さんの案内で、世界平和聖堂・県立美術館、呉市にある瀬戸内海大型、水理模型・入船山記念館等を見せてもらった。真田さんは、県の教育委員長をやられたり、実業界は元より、県の科学技術界に於ては唯一の長老であり、各方面のお世話を引き受け、非常に顔が広い。世界平和記念聖堂は、原爆による数十万の尊い犠牲によって、世界戦争に終止符が打たれた、その犠牲者の冥福を祈り、更に世界平和を祈念するためにフーゴー・ラッサール神父の尽力により平和を願う内外の善意の人達の協力によって生まれたもので、その聖堂こそは、原爆を受けた広島市民はもとより、世界の恒久平和を祈念する悲願の結晶である。堂内に設備されたパイプオルガンの壮厳な楽音、塔上高く設備された平和の鐘の響き渡るとき、人々の心の中に、平和の願いを、日日、しみじみと新たにすることであろう。そういう悲願にも拘らず、世界の強い抗議にも馬耳東風、依然として米ソ英仏中印諸国は原爆実験を続けている。この地上から原爆の脅威が無くなるのは、いつの日であろうか。ベトナム戦争・中近東その他の多くの国々において闘争は断え間なくおこっているし、今またキプロスに火の手があがり、ギリシヤ・トルコの全面戦争の危機さえはらんでいる。（停戦協定が成立したという）後に控えている両大国の動向が微妙である。昨秋石油ショックの際、例のOPECの、一方的な石油の大巾な値上げに、業を煮やしたアメリカは、第三国をして軍事的に制圧させようとしたとさえ伝えられたが、世界到る処に危機とはらんでいる現状である。国の安危に拘われば、各国ともに、「蝸牛角上、何をか争える」と大悟することもできかねよう。アメリカに比べて、比較にならぬ位に資源や食糧を外国に依存している日本は、前号でも一寸触れた通り、一朝輸入が杜絶した際を考えると、実に寒心に堪えないものがある。如何なる手を打つべきか、国民皆が真剣に考うべき重大問題であろう。

瀬戸内海の汚染は、年々甚だしくなって来ている。通産省は、昭和45年、内海全域の水質汚濁防止に対する、水理模型建設が検討せられ、工業技術院中国工業技術試験所に建設せられることになって、昨年5月、世界第一の規模を誇るこの模型実験所が完成した。水平方向2000分の一、垂直方向150分の一縮尺で、これによって、内海の海流、大規模埋立計画、排水放流計画の適否、排水拡散現象、海水の交換等、汚濁防止に関する各種の調査研究が行なわれるという。所要の測定装置、自動記録、計算設備等完備せられて、将来の研究成果が期待せられる。所長福田保さんは小生旧知の方で、お互に再会を喜こんだ。

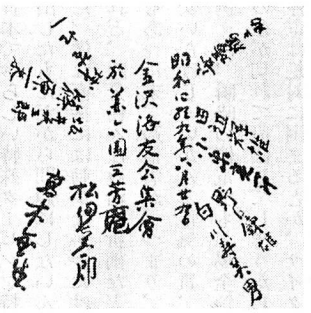
帰途、広島県の史跡、重要文化財となっている入船山記念館を見せて貰った。明治19年呉に海軍鎮守府が置かれ、爾来、わが我の海の守りとして重要な役割を果たして来た鎮守府の遺跡であって、東郷長官初め歴代の長官の官舎として使用されたもので、種々の旧海軍資料、郷土の資料や海軍将星の遺墨など興味深く見せて貰った。終戦前後の海軍の苦悩、終戦最後の日の長官旗など、感慨一入であった。

5月18・19日、昭和24年卒業生の、卒業25周年記念が、熱海・箱根で、催されるについて、お招きを受け、丁度東上中であったので、帰途、寄せて貰った。竹屋さんも参会された。このクラスは、終戦後、復員して来られた陸海軍士官その他異色の方々で在学当時の印象が特に深い。元軍人の方々は、そのままであったなら何れは、将星になられた筈の俊秀。参会されたのは30幾名。何れも戦

中・戦後の苦難を乗り越え、我国現在の繁栄を築く一翼を荷って来られた方々で、その懐旧談は、感銘一入であった。中野稔君は公用をすませて、やっと深夜12時頃到着、三島からタクシーを飛ばせて来たとのこと。恐らく、彼は一万円を払っただろうと噂された。翌日の箱根廻遊は晴天に恵まれ、行く先き先きで、秀峯富士の麗姿を仰ぐことができたことは非常な幸せであった。幹事諸君、殊に国鉄舟田正男君及び国鉄の方の行き届いた配慮には万腔の謝意を表したい。小田原駅で、思い出多いこの記念会を復誦しながらお互の健康と再会を期して、お別れした。

この会と、日を同じくして、昭和29年卒業の方々は卒業20周年の記念会を催された。（前号会報所載）小生は、丁度東上中であったので、失礼したが、各位の御健康を祈る。

6月29日、金沢で、金沢在住の方々の集りがもたれた。金沢工業大学創設に当り、聊かお手伝をした縁故から、請はるるままに、未だに前期だけ、集中講義にお邪魔しているが、殆んど全員、9人が兼六園、三芳庵に集って下さったことは感謝に堪えない。昨年は、白川寿美男教授が、本年は小泉亮一郎教授が何れも勲三等瑞宝章をお受けになったことはお目出たい。皆さんのお元気な様子を伺って、大変嬉しく思った。なお、田辺輝雄君は、仏教篤信の方で、参会者に松原泰道師の「般若心経入門」を恵贈されたが、厚く御礼申上ます。（昭和49年7月22日）



鳥養先生と人絹工業

この記録は昭和二十八年に清風荘（京都大学）で鳥養先生の懐古談を拝聴したものの一部である

帝人顧問
昭和五年卒　和田正弘

そうだね、帝人と特に縁が深くなったいきさつは、人絹の紡糸機のことで、久村君（のちの帝人社長）から診断を頼まれたことがあって、それ以来親しくつきあって来た。勿論工場にも度々行った。

◇

当時千何百キロかのサイクルコンバーターを富士電機が納め、広島工場で運転していた。そうしたら、冬に入った頃、どういうわけか、出力が不足して紡糸機のポットモーターの回転数が低下したんだ。そこでこれは富士の設計が悪いのか、あるいは、規格を間違えたのかということで、非常な問題になり、大騒ぎがもちあがった。それで久村君が、僕にそれを鑑定してくれといって来た。ところが、その当時は人絹工場は見学一切まかりならんことになっていて、誰も入れない。僕も入ったことはないし、鑑定しろったって、それは無理な話だし、又自分にも判りそうに思えないから断ったんだ。そうしたら、電報が再三きて、どうしても来てくれというんだ。行ったって僕には見当つかんかも知れんから、それでは、行く前に一ケ月分の配電日誌も見せてくれと要求したんだ。送ってきた日誌を検討してみると、朝と晩、それから雨の降った日と天気の日とかによって、電力の食いかたが違うことを発見した。それで僕は行くには及ばん、問題は製造現場の化学方面にあるように思うから僕の領分じゃない、といって電報を打った。そうしたら、いや、それでも来いというんだ。そこで又条件を出して、工場の中へ勝手に入れるか、そして僕のいう通りに勝手なことをさせるか、といったんだ。それが容れられたので行くことになった。ところが、僕が丁度行った時にもオーバーロードして、運転してないんだ。僕は考えたネ。それで、ホースでもって工場の床へ水をじゃんじゃん撒け、といったんだ。現場の連中は、それは困るという。困るといったって、それなら僕は来た甲斐がない、と押したら、マアやってみようということになって、水を撒いてみると、いっぺんにロードが下がって問題は解決した。よく調べてみたら、ポットの外側に、真白い芒硝の結晶が一面に出来ていたんだが、水を撒いて部屋の湿度が増すと針状の結晶はスーウと溶けてしまった。僕もそこまで適確には知らなかったんだが、その当時は、こういうことすら誰も気がつかなかったんだナ。それで、帝人では、このことをよその会社のものに知らさんほうがよい、といって、僕はそれで口どめされたんだ。これがなんと昭和の初めのことだ。

それから、岩国の工場も、では見てくれということになって行ったら、岩国のほうは新式の工場で、湿度が高くしてあって、その影響は問題なかった。この時に湿度はどれ位に保てばいいかの限度が判ったんだ。

◇

人絹用ポットモーターには、そもそもの始まりから僕は関係していた。当時、人絹会社とはどことも関係なかったが、神戸製鋼と親しくしていた。紡糸機のポットは、もとはラインシャフトで、ベルトでもって二十錘位を運転しておったんだ。それを帝人で、各錘を個々のモーターで運転することを考えた。ところが、そんなモーターはどこにもない。つまり、竪形の小型インダクションモーターでポットを駆動するのだが、暫く運転してるとジョイントの部分が折れてしまう。そんな乱暴な設計でもって、帝人は相当長い間事業を続けていたんだヨ。

そこへ神戸製鋼が出てきて、これに非常に力を入れることになったんだ。というのは、神戸製鋼が鈴木商店のパニックで工合悪くなり、電気部は整理してしまおうということを田宮さん（のちの神戸製鋼社長）から僕に相談があった。で、まあ続けておやりなさいよ、と返答したんだが、しかし、いつまでもダラダラとやるわけに

はいかんから、二年か三年かやってみて、もち切れんようになったら考える、と期限付きでやることになった。そこで、一体電気部で何の仕事に主力をおけばよいか、僕に検討してくれというんだ。そこで、結論として、ポットモーターと、電池式の運搬車と、それから電車のエヤーブレーキのモーター、この三つにしぼり、ほかのものは一切やめ、ということになって、特にポットモーターには力をそそいだ。そりゃしょっちゅう僕も引張り出されて、火の出るような議論をしながら設計を進めたヨ。結局ポットモーターは僕の友人の小田島（のちの神鋼電機社長）がやったのサ。

◇

その当時は大学の卒業生は非常な就職難の時代で、昭和の二、三年頃から、五、六年迄はとんと売れなかった。僕はその前から、学生によくいってたんだが、電気のエンジニアが、電車を走らすとか、電灯をつけるとかいうような電気プロパーの仕事だけに限られたケチな考えではいかんと、もう少しほかの産業へもどんどん乗り出すべきだ。例えば、製鉄とか、化学工業とか、製紙とか、繊維工業にだ。こういうところは電気の人が大いに働く余地があるんだからと、盛んにいっていたんだ。偶々僕が人絹会社に知りあいが沢山出来てたもんで、卒業生にしきりにすすめたんだ。君もその一人だ。そんなことで、うちの卒業生は人絹会社へあんなに沢山入社したという次第だ。

◇

そうそう、そんなことをやっているうちに、ブリーダータービン式の自家用火力発電所をつくったら、電力コストが非常にさがるということを思いついた。蒸汽で発電して、残った低圧蒸汽を工場へ送れば、僕には数字は判らんけど、とにかく電力代はうんと節約される筈とにらんだ。これは誰しも思いつく話なんだが、そういうふうなことのためにも卒業生を人絹会社へ送りこめばと思って久村君に話したら、それは面白い、一つやろうじゃないか、となったんだ。それで、すぐやれる人を二、三人推薦してくれないかといわれて、火力発電所に経験のある山元海門君を入社させて、同君に計算させてみたんだ。僕のうろ覚えの記憶によると、設計通りにいったら、電力代の節約だけで当時の帝人の配当がおよそ出ることになったんだ。それで、社内でも、じゃんじゃんそういう機運に向っていった。これが人絹会社が自家用火力を持つようになったそもそもの始まりとなった。

ところが、その当時は、大変な不況時代で、電力各社は電力があり余って困っていた。帝人が岩国で大きな発電を始めたら、山口県営（のち併合されて中国電力になる）の電気部は非常に困るんだ。そこで、電力業者は反対運動を起こしたんだ。大阪の電気協会なんかが、一体鳥養という男はけしからん奴だ、電気の吾々の仲間でありながら、電力会社が困まるようなことを考えているそうだ、と僕のところへ抗議を申込んで来たりした。それから、僕はまだ脱線して、人絹以外にもそういう余熱をもったところがある筈だ、と考えて、宇部のセメントへも見にいったヨ。そうしたら、新聞記者につかまって、新聞へ書かれちゃったんだ。で又電気協会から叱られた。

併し、色々な資料を集めて、逓信省へ願書を出したヨ。ところが逓信省は全然取りあげないんだ。電力が余って困ってるところへ、日本で珍らしい特殊タービンを持出したもんだから問題にしないんだ。僕は直接には動かなかったけれど、随分色々な政治的折衝などもあった末、逓信省が、つまり、安いだけじゃいかん、電気の質、例えば、瞬時の停電でも工場全錘の糸が切れて凝固してしまうから停電は絶対に困まるとか、サイクルの変動は糸の太さに直接影響するとか、マアその他電力会社の電力ではどうしても都合悪いんだ、という理由でもあるなら、それは許可してもいいがと、こういうところ迄漕ぎつけた。それで、今度は帝人と僕とで一策考えたんだが、人絹会社では、つくる糸の太い、細いによって、しょっちゅうサイクルを自由に変えんならんという理由をつけた。良い糸をつくるためには糸の種類によって撚りを変えることが絶対に必要だ、というようなことを山元君が妙な手真似で説明しおったワ。そんなことから、岩国工場のタービンは回転が上、下七パーセント変わるように設計されたんだが、本当からいえば、これはそれ程必要なことではないんだ。今日考えてみて笑われるようなことだ。そうこうして、ようやく許可をとったんだが、帝人が皮切りだったから一番苦労したわナ。併し、これは非常な功績だったと思っている。

とにかく、初めは、自家発電をやるといっても電力業界からはいじめられ、役所からは困るといって相手にされなかったり、大騒ぎしたのだが、戦争が始まってからは、逆に電力会社へ電力を応援して非常に感謝されることになるとは、随分滑稽なようなことだが、実に感慨無量だね。こういうふうな熱の合理化問題は、いまでも各方面でもう少し考えてみる必要があるナ。

この発電所の問題は、他にも色々な話の種を残したのだが、当時の人達にとっては憶い出の深いものがあるネ。

昭和四十九年度
洛友会総会の記

六月二日（日曜）午前十一時より京都ロヤルホテルにおいて、洛友会総会及び関西支部総会が共催にて盛大に催された。出席者約一〇〇名で夫人同伴の方も数組御見えになった。

田中哲郎教授司会の下に、芦原副会長、議長席につき、挨拶され、その中で鳥養先生の米寿祝賀記念行事に対し、洛友会の方々の御協力に対し、発起人代表として謝辞を述べられた。

引き続き、昭和四十八年度の会計報告並びに昭和四十九年度予算審議を山本幹事が説明、会費値上げに就き、本部会費一七〇〇円、支部会費七〇〇円、計二四〇〇円に値上げする原案を満場一致承認可決された。又役員任期満了改選についても会員重任することが可決せられた。

次で関西支部総会に従い、上西亮二支部長が挨拶、型の如く議事

昭和48年度収支決算

昭和48年4月1日から昭和49年3月31日まで

収入の部

科目	決算額	予想額
会費	2,610,600	2,630,000
〃（講習所）	273,500	300,000
預金利子	288,293	300,000
広告掲載料	1,394,750	1,550,000
借入金	1,000,000	0
雑収入	7,000	0
収入計	5,574,143	4,780,000
前年度繰越金	4,321,869	4,321,869
合計	9,896,012	9,101,869

支出の部

科目	決算額	予算額
名簿編集費	5,600	5,000
〃 印刷費	2,613,500	2,260,000
〃 発送費	449,767	530,000
会報編集費	0	5,000
〃 印刷費	354,200	240,000
〃 発送費	511,315	500,000
備品費	25,327	20,000
通信費	51,986	60,000
会合費	71,940	50,000
総会費	150,000	200,000
集金費	156,050	150,000
総掛費	338,521	350,000
旅費	282,580	260,000
懇話会補助	150,000	150,000
借入金返済	1,000,000	0
支出計	6,160,786	4,780,000
次年度繰越金	3,735,226	4,321,869
合計	9,896,012	9,101,869

預金および現金（昭和49年3月31日現在）

信託預金	3,608,831	郵便振替	977
普通預金	81,948	現金	43,229
当座預金	241	合計	3,735,226

昭和49年度収支予算

昭和49年4月1日から昭和50年3月31日まで

収入の部

科目	予算額	前年度決算額
会費	4,250,000	2,610,600
〃（講習所）	425,000	273,500
預金利子	300,000	288,293
広告掲載料	1,600,000	1,394,750
借入金	0	1,000,000
雑収入	0	7,000
収入計	6,575,000	5,574,143
前年度繰越金	3,735,226	4,321,869
合計	10,310,226	9,896,012

支出の部

科目	予算額	前年度決算額
名簿編集費	6,000	5,600
〃 印刷費	3,330,000	2,613,500
〃 発送費	700,000	449,767
会報編集費	5,000	0
〃 印刷費	495,000	354,200
〃 発送費	637,000	511,315
備品費	25,000	25,327
通信費	60,000	51,986
会合費	80,000	71,940
総会費	150,000	150,000
集金費	160,000	156,050
総掛費	350,000	338,521
旅費	300,000	282,580
懇話会補助	150,000	150,000
借入金返済	0	1,000,000
支出計	6,448,000	6,160,786
次年店繰越金	3,862,226	3,735,226
合計	10,310,226	9,896,012

が行なわれ、正午総会が終了した。

ここで関西電力㈱提供の原子力発電の映画を約三〇分鑑賞し、近代科学の粋たる原子力発電について電気屋としての常識を勉強する機会を与えられた。同社、京都支社の担当各位の御好意に対し、本紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

午後十二時半より、昼食、歓談に入り、中部支部長、本多静雄氏名誉教授の松田、阿部両先生、間崎竜夫氏、講習所を代表され立石亨三氏、大阪大学を代表され喜多村教授等に、テープルスピーチをお願いし和気藹々の裡に午後二時閉会した。（幹事　山本記）

甲子会五十周年記念大会

大正十三、甲子年の卒業生からなる甲子会は、本年五十周年を迎え、京都市において左記のように記念大会を持った。

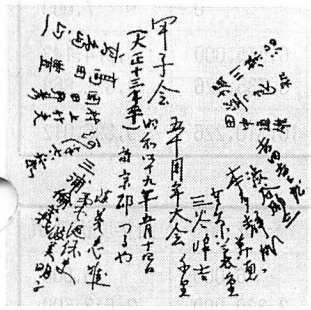
昭和四十九年五月十四日午前十一時駅前のステーション、ホテルに集合した。

久し振りの会合に初めは誰だったかなあと戸惑う場面もあったが、すぐ昔の面影を思い出し、お互いの健康と元気をよろこびあい、歓談数刻、同所にて会食後、

近くは聖護院の錦山荘で宿をともにして語り続けた。

当日の出席者は芦原義重、岡田邦彦、河津吉兵衛、菊池保夫、高田豊、高島正一、田中道雄、巽良知、堀川栄治、本多静雄、同夫人、岐美忠雄、同夫人、三谷峰吉、同夫人、三浦倫義、村上竹夫、吉田吉三郎、渋谷励三の十六名と同伴夫人三名の計十九名であり欠席者は九名であった。

懇親会には恩師鳥養先生、岡本先生、羽村先生をお招き申しあげましたが、御都合で御出席願えなかったことはまことに淋しく且つ残念であった。後で寄せ書、記念品、写真等をお届けして報告の御挨拶を申しあげた。



貸切バスで三十三間堂と桂離宮を拝観した。古都のただずまいに、一同今更乍らの懐しさと感銘を覚えた。その後岡崎の「つるや」料亭で懇親会を開いた。開宴に先立って物故恩師、級友の冥福を祈って黙祷をささげた。また今後は隔年会を開くことを約した。宴のすすむにつれ、懐久談に花が咲き、思い出の余興も出るなど、楽しさに時間の過ぎるのを忘れた。午後八時すぎ洛友会と甲子会の万歳を三唱し、二年後の再会を期し惜しい別れを告げ散会した。なお半数

北海道支部総会

六月二十九日に、二年ぶりの総会を開いた。昨年から本年にかけて、北海道大学に四名の新支部会員を加えたので歓迎をこめて十名が参加した。

場所は、いかにも北国らしい名の札幌市内小料亭「氷雪の門」。

そこで北海道最大の薬房の社長師尾さん（昭17）の異色の話を傾聴するのも毎回の楽しみの一つ。その後2次・3次……会も盛大でしたが、札幌市在住以外の方が仕事などの都合で見えず残念であり次回をお待ちします。

（幹事　芝山竜一記）

洛友会昭和24年卒業 25周年記念クラス会

標題について、下記により開催し、両先生を交えて盛会裡に終了しましたのでご報告します。

記

1、日時　昭和49年5月18日(土)—19日（日）

2、場所

(1) 熱海（国鉄いでゆ荘）18日15時から

(2) 箱根周遊（観光バス貸切）19日　10時から16時　小田原駅で解散

3、出席者

(1) 招待者　松田先生、竹屋先生

(2) 参会者

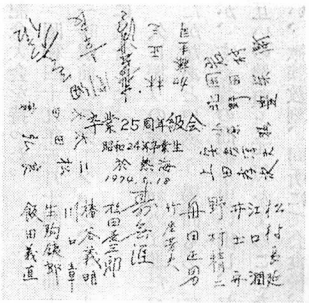
安房、井上、飯田、生駒、岩村、上田、江口、小原、大田（弘）、太田（実）、岡田、加藤、北野、関、椿谷、中野、野村、林、二松、細包、松村、森井、川口、舟田　計24名

4、会の模様

25年ぶりに会った一同、朝3時頃まで、経歴を話し、抱負を語り夜半（0時）に駈けつけた者もあって、誰一人早寝する者もなく、旧師を囲み寄せ書をしたりして楽しい一時を過しました。

翌日は、観光バスに乗って、新緑と青い湖、残雪を頂く富士を眺めて、青春にかえって、放歌、談笑のうちに、小田原駅で、又の集いを約して解散しました。

（幹事　舟田）



訃報

昭41卒　藤村　勇次　48・2・22
昭4卒　内藤　猛　49・5・29
昭23　山本　泰治　47・11・25

以上の方々が、ご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

住所不明者

43小亀　英己　40丸太　宜洋
26林　幸平　42安井　徳政
44井池　政則　38犬伏　俊彦
47若宮　康夫　38疋田　正
45田村　秀行　24阪根　明
44長野　隆伴　47長島　雄策

42根石　信行　37高橋　武文
23長岡寿一郎　45荻山　嗣晃
44堀　忠市　43森　武宏
33黒岩　浩一　36高口　穎三
48川上　孝仁　35北脇　重康
47真野　省三　28市川　健二
25森岡　昌之　22小島　隆
37増永　信彦　42本多　岩夫
47種野　晴夫　45桑原　隆治
13皆川　良二　33永井　元
41藤林　信也　30中野　嗣郎
42青木　紀之　47稲垣　耕作
36橋本　直樹

以上の方々は郵便物が返送され住所が不明ですので御存知の方は、事務局に御通知下さる様お願い申し上げます。

昭和三十四年卒業生 同窓会

昭和三十四年電気・電子工学科卒業生は、卒業十五周年を記念し、六月十五、十六日、箱根強羅において同窓会を開催しました。

当日は林（千）、池上両先生の御出席を頂き、二六名の参加者は教室の現況、仕事や家族の状況報告など夜の更けるのも忘れて歓談しました。翌日は有志により六月には珍らしく晴れ上った箱根をドライブし、二十年会の開催を約して散会しました。

京都大学電気電子工学科昭和34年度卒業15周年記念　S49. 6. 15

出席者は左の通り。

林（千）先生、池上先生

（電気）秋葉、伊藤（健）、磯田上田、川本、河合、黒田、高畑西島、西村、橋本（勉）、村上（敏明）、山本（真吾）

（電子）井上、伊原、大沢、河崎進士、鷹尾、長尾、信国、橋本（清）、東本、吹抜、畚野、三輪

（幹事　西島）

中部支部総会並びに交歓会の報告

去る七月二十日昭和四十九年度の中部支部総会が伊勢五ヶ所湾内七日島で開かれ、翌二十一日はゴルフ、釣り、囲碁、海水浴などの交歓会が催されましたので簡単に報告いたします。

交通はやや不便なところでしたが大学教室から大谷泰之先生、上之園親佐先生をお迎えし、会員の参加数は家族同伴者を含めて三十三名という盛況でした。これに加えて特筆したいことは、この日から待ちに待った梅雨明けが宣告され、二十日、二十一日の両日とも久し振りの好天に恵まれたことでした。

まづ参加会員名を列記すると次の通りです。

本多静雄（13）同伴者一名、田中卓次（大15）、吉村敏恭（大15）、古田久一（昭6）、富満通哉（昭7）、高尾磐夫（昭8）同伴者一名、川端太郎（昭8）、川村進（昭12）、外山敏夫（昭22）、末田和（昭19）、近藤章（昭22）、石川進（昭26）、遠藤茂（昭27）、前原恒之（昭28）小林正（昭29）、島田洋一郎（昭29）同伴者三名、野坂泰彦（昭30）同伴者三名、内田頼利（昭37）、松本幸男（昭41）、平林喜[illegible]（講、大8）、田中肇（講、大9）、石川鉱一郎（講、昭2）、山田直一（講、昭3）内山茂（講、昭13）、他にゴルフコンペのみ参加、西尾又一（昭23）、横川京次（昭28）

総会の場所となった七日島は五ケ所湾内にある広さ約十万坪のこんもりした緑の島で、島全部が中部支部長本多静雄氏が会長をつとめる日本電話施設KKの修養道場です。島の海辺に真珠の家と浜の家が並び、中腹の静かな谷間に疎野な谷の家、それよりや上寄りで展望のすばらしいところに萱葺きの山の家があって参加者は全員これらの建家に分宿することになりました。

総会は二十日午後六時より山の家で開かれました。まづ最近物故された庄野誠一、村瀬邦朋両会員の霊に黙祷を捧げたあと、会計報告、行事報告、役員選挙など型通りの総会議事を終え、引きつづいて大谷先生から鳥養会長を初め諸先生方の近況について、また上之園先生からは最近の大学紛争問題についてそれぞれ詳しいご報告がありました。

このあと浜料理をパクツキながら自己紹介をかねての談笑が賑かにつづきましたが、この七日島での総会の雰囲気を激賞する言葉が数多く開かれました。やがて万歳三唱で楽しかった会合を閉ぢ、静寂の山道を辿って割り当てられた建家につき、神秘的にすら思える七日島での一夜の夢をむすべば、翌二十一日は快晴のすがすがしい朝で五ケ所湾の水面には真珠貝の筏が絣模様のように美しく浮んでいました。この美しい風光を俯瞰しながら山の家で朝食を偕にしたあとはいよいよ交歓会の初まりです。ゴルフに行かれるもの、釣舟に乗られるもの、海水浴を楽しむもの、囲碁に興ずるものなどそれぞれの同好会に分れて、久し振りの交友を温めて随時散会した次第です。これらそれぞれの交歓会の模様についてはそれぞれの幹事から後日報告してもらうことになっておりますので省略します。

（古田記）

編集後記

。酷暑の候となりましたが、会員各位には、益々御健勝のことと存じます。鳥養先生も御壮健ですが、少し足が弱られたので、会合には出席されず、御宅にて静養されて居ります。岡本先生、林重憲先生も殆ど御宅にてご静養中とのことです。鳥養先生の米寿祝賀記念事業に際しましては、賛助会員の多くの会社並びに洛友会員の方々より、予期以上の御賛同を得まして目下

着々と、先生の随筆集の刊行準備を致して居ります。九月上旬頃には、完成の見込にて、詳細は追って御報告致しますが各位の御協力を厚く御礼申し上げます。

本年は、会費を値上げ致しましたが、これが洛友会運営の基礎となりますので、御協力下さいます様、お願い申上げます。会費未納の方には会報に振替用紙を同封してありますので何卒よろしく御願い申し上げます。

◇

最近、会報の原稿の応募が少なくへんしうに苦労をして居ます。松田先生には、何時も御執筆をお願いし御健筆により、冒頭を飾らして頂き感謝に堪えません。又、今回は帝人の和田正弘氏より鳥養先生と帝人の結びつきに関する興味深い回顧談を録音テープよりまとめて頂きました。科学技術の進歩した今日に於ても非常に教訓的な示唆を含む問題であると考えます。和田さんの御厚意を深謝致します。

度々御願いすることですが、会報の原稿は、多々益弁ずで編集の際、適当に組合わしてのせますので、会員の各年層の方々（特に若年層の御投稿を希望します）より活発な御投稿をお願いします。

（幹事　山本記）

「電気評論」特集号の御案内（各冊 定価 400円 送料 28円）

電気評論8月号　・好評発売中・

―特集・電気接点の諸問題―

電気機器の生命線ともいうべき，電気接点に関する研究は，数多くの研究者が，種々の現象の解明に努力されてきたが，なお解明されていない問題点も数多い。

本号は，開閉接点，端子，コネクタなどの部品がどのように設計され，かつ，電気機器，電子機器，通信機器などにどうように使われ，どのような問題点を有するかについて，それぞれの分野の専門家が解明したもので，電気機器，電子機器，通信機器の設計及び保持運用にたづさわっておられる方々の必読の参考書である。

（次号予告）電気評論　9月号・9月10発売・

―特集・火力発電所と効率―

新鋭大型火力，石炭火力，ガスタービン火力，ディゼル火力，新しい複合発電プラント，産業用自家火力等，火力発電システムと新しい角度から再検討を加え，熱効率の向上と関連システムの総合的効率化を追究！

既刊特集号ご案内

第68号（昭48.5）特集・原子力問題	300円	〒28円
第69号（昭48.臨）特集・最近の電力設備における保護継電器	300円	〒28円
第70号（昭48.6）特集・安全と防災	300円	〒28円
第71号（昭48.7）特集・超高速交通用リニアモータ	300円	〒28円
第72号（昭48.8）特集・火力発電所の公害と環境	300円	〒28円
第73号（昭48.9）特企・沼原発電所の概要について	300円	〒28円
第74号（昭48.10）特集・20kV・30kV級配電	400円	〒28円
第75号（昭48.11）特集・変電所と環境	400円	〒28円
第77号（昭49.1）特大号・昭和48年における電力技術革新のあゆみ	800円	〒40円
第78号（昭49.2）特企・海外主要国の電気事業の近況	400円	〒28円
第79号（昭49.3）特集・最近の磁性材料の特性とその適用	400円	〒28円
第80号（昭49.4）特集・最新の給電	400円	〒28円
第81号（昭49.5）特集・架空送電	400円	〒28円
第82号（昭49.6）特集・電気と安全	400円	〒28円
第83号（昭49.臨）特集・電気磁気と測定	400円	〒28円

ご購読は最寄りの書店または直接本社へお申し込み下さい。

株式会社 電気評論社

本社　〒606 京都市左京区田中大堰町49
電話 京都（075）701－2582